

から長い舌を出した唐人武者の兜に、鬼がかみついている勇壮な絵が描かれています。

べろくん出しの描法は、自由奔放で、色は朱と墨、黄と僅かな青という単純明快なものです。見た目には、他の凧のようにはなやかでもないし整っていません。けれどもいったん大空高く舞い上がると、命を吹き込まれたかのように生彩を帯びてくるから不思議なのです。青空を背景としてくっきり浮かんでいるところも良いし、吹き荒れている空に荒縄の尻尾をなびかせて右に左に動き回るところはすさまじく、また、いたましく感じるときもあります。会津唐人凧は空に浮かんで始めて凄味を帯びてくる、まことに不思議なデザインなのです。

大きさは、大きなもので縦6メートル、一般的なもので1メートル位あります。下部が全長の約半分をしめているのが特徴です。

### (3) 凧合戦専用の凧

明治維新当時15歳の少年だった井深梶之助（後の明治学院大学創立者）が語った思い出話の資料によりますと、「会津では冬になると盛んに凧あげが行われた。奴凧、ます凧、くらげ凧などもあったが、少年たちにもっとも愛好されたのは唐人凧であった。この凧をあげるときは、細いわら縄の尾をつけ、空に舞い上がると鳴子がうなって、実に壮快で、尾の先に刃物をつけたりしてけんかささせたものだった。凧合戦専用の勇ましい凧で、武士の子弟は、とくに唐人凧を愛好した。」と書かれています。



絵付け作業

### (4) 唐人凧の由来

唐人凧は、約400年前に大陸より長崎へ伝えられたと言われています。その凧がどうして山国会津へ伝えられたのか謎とされています。

蒲生氏郷が会津に持ち込んだという説があります。氏郷はまぎれもなきキリシタン大名で会津に漆器や清酒など今日に伝わる産業を起こしたばかりでなく、すぐれた知識人として西欧文物も会津にもたらしたことから考えられました。

次に会津藩の海外貿易を一手に引き受けていた長崎の豪商足立仁十郎説があります。仁十郎はしばしば会津を訪れており、その際長崎土産として異国の珍品奇品を運んだことは容易に想像されるからです。しかし、この二つの説とも定かではありません。

### (5) 唐人凧作り

作り方は、最初に竹を使い、骨組みを作ります。唐人凧は長円形を組み合わせるため手間がかかります。骨の結び目は糸で巻きます。次に和紙をのりづけし、最後に絵を描きます。絵は墨で形を線描きしたあと染料や顔料で何度も色を重ねてゆきます。